令和5年度 陸前高田市文化遺産調査概要報告

ESD・SDGs センター　大西　浩明

1．目的

2011 年の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、2012 年度より 9 回にわたって本調査団を派遣してきた(2020 年、2021 年はコロナ禍によって中止)。この間、文化財調査やそれをもとにした教材作成を進めるとともに、被災地の復興状況を視察し、被災された方からの聞き取りやボランティア活動などを通して、ESD の理念に基づいた防災教育に資する教材作成を行うなど、大きな成果を得てきた。本年度は、これまでの成果をさらに深めるため、本調査団を組織し実施する。

※なお、参加予定であった美術教育講座の山岸公基教授が体調不良のため不参加となり、観音寺で予定していた文化遺産調査は実施できず、ESD 防災に関する調査・研究のみを実施した。

2．実施日　　令和 5 年 9 月 3 日（日）～6 日（水）

3．参加者　　学部生　：大竹玲央、櫻木友渚、藤本尋巳、村島大賀、田中愛花

　　大学教員：大西浩明

4．宿泊地　　民宿吉田（陸前高田市米崎町松峰 110-5）

5．日程・活動

9 月 3 日（日）

7:10	伊丹空港南ターミナル（ANA カウンター前）集合
8:00	ANA731
9:15	仙台空港着 →　レンタカー借り上げ
10:00	出発
10:20	雷神山古墳
11:00	名取市震災復興伝承館　【名取市閖上東 1 丁目 1-1】
11:35	多賀城跡・多賀城碑
12:10	東北歴史博物館
16:10	東日本大震災津波伝承館　【陸前高田市気仙町土手影 180】
17:30	民宿吉田着

【雷神山古墳】

東北最大規模を誇る前方後円墳。

主軸 168m、後円部径 96m、高さ 12m、前方部長さ 72m、前端幅 96m、高さ 6m の 3 段築成。

前期古墳の特徴から、4 世紀末から 5 世紀初めと推定され、壷形埴輪や壷形土器が出土していることから、かなり広い地域を統治した地方豪族の首長の墓と考えられている。東北最大というだけあって、ぐるりと一周するだけでひと汗かくほどである。

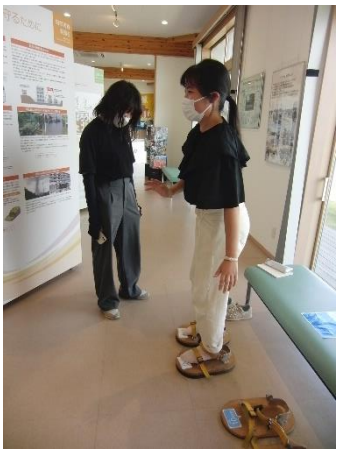
雷神山古墳の石碑

雷神山古墳の概観

【名取市震災復興伝承館】

津波被害の大きかった閖上地区に 2020 年 5 月に開館。

震災時や復興の様子についての展示等は他の伝承館とも変わらないが、水深 10 ㎝、30 ㎝時の歩く時の体感ができる履物や水圧体感ドアなどがあり、ついやってみたくなる。水深 30 ㎝ともなると、かなりの重さで自由に動けないことがよく分かった。疑似体験するということは大事であることを再確認する。



水の重さと強さを体感する

【多賀城跡・多賀城碑】

古代律令政府により陸奥国の国府が置かれたところで、奈良・平安時代の東北地方の政治・軍事・文化の中心地。多賀城跡の南東約 1 ㎞には、多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡、多賀城跡の南前面には計画的に配置された当時の街並みの跡がある。

現在、正門にあたる南門が復元され、門の両脇に築地塀が建設中で、創建 1300 年の 2024 年度公開を目指しているという。

多賀城碑は日本三古碑の一つで、松尾芭蕉も旅の途中にこの碑を訪れ、深い感動をもって対面した様子が「おくのほそ道」に記されている。

復元整備中の南門と築地塀

【東北歴史博物館】

東北歴史博物館

総合展示室では旧石器時代から近現代までの東北地方全体の歴史を、時代別の 9 つのコーナーに分けて展示している。また詳細展示のコーナーを設け、東北地方の特徴をよく示す 3 つのテーマについて深く掘り下げた展示を行っている。

特別展「古墳をつくる人びと　―はにわ工人, ハジベ君！―」が開催中で、古墳づくりやはにわづくりを楽しく学ぶことができるよう、様々な工夫を凝らして展示されていた。

9月4日（月）

9:30	陸前高田市教育委員会表敬訪問　【陸前高田市高田町字下和野 100】
10:10 13:50	防災クエスト大作戦に参加 東日本大震災津波伝承館見学、陸前高田市内の震災遺構見学 （一本松、タピック４５，旧気仙中学校など）
15:30	気仙大工左官伝承館【陸前高田市小友町茗荷 1－237】
17:00	民宿吉田着

【陸前高田市教育委員会表敬訪問】

山田市雄教育長、細谷勇次教育次長、佐々木敦美文化財係長、松坂泰盛博物館長にご同席いただき、約 30 分表敬訪問をさせていただいた。派遣団員の自己紹介のあと、山田教育長からは、これまでの 11 年間にわたる文化遺産調査等に対して奈良教育大学へ感謝の言葉をいただくとともに、今回の防災教育の調査・研究に大きな成果が得られるようしっかりと学んでほしいという激励をいただいた。佐々木文化財係長からは、「今回は残念ながら文化財調査はできないが、次回はぜひ同行させていただき共に調査にあたらせていただきたい。」旨の申し出があった。

山田教育長より激励の言葉をいただく

終了後、7 階の展望ルームで、細谷次長より市内の被災状況や復興状況などについてご説明いただいた。愛宕山を切り崩し、平均 10ｍのかさ上げをした市街地には、新たな防潮堤が完成し、様々な公共施設も再開したが、なかなか人が戻っていないというお話に、「復興」という言葉の重みを感じずにはいられなかった。

市役所展望ルームにて

【防災クエスト大作戦に参加】

陸前高田のまちなかを歩いて、防災を学びながらまちを楽しむ、体験型のゲームイベントが「防災クエスト大作戦」である。観光案内センターで参加料 500 円を払って問題用紙をもらう。指定された５つのポイントへ行き、そこに掲示された指示に従って問題の答えを埋めていくと、ある言葉が浮かび上がる。出揃った５つの答えをさらに指示通りに並び替えると、最後の謎解きとなり、最終的に一つの言葉を導き出すという内容であった。

みんなで謎解き！

歩く範囲はそう広くはなく、１時間から１時間半程度で回れるということだったが、一つ一つの問題がなかなか凝ったもので、そう簡単に答えの出るものはなかった。途中、本丸公園に上がる避難路の階段を上ったり、「津波てんでんこ」の言葉が出てきたりと、防災について楽しみながら体感できる内容であった。最後の答えを書いて観光案内センターに持っていくと、市内店舗で使えるクーポンが貰えて、地域の活性化にもつながる取組であると感じた。

【東日本大震災津波伝承館見学】

被災した消防自動車

「歴史をひもとく」「事実を知る」「教訓を学ぶ」「復興を共に進める」という４つのゾーンからなっており、被災した実際の物、被災現場をとらえた写真、被災者の声などを展示しているだけでなく、津波のときの人々の行動をひもとくことで命を守るための教訓を共有しようとしている。特に、人々がそのときどのように考え、どんな行動をとったのかというところに全員が大きな興味をもった。

「３ｍなら大丈夫」、「３階に上がれば大丈夫」といった、それまでの自分の経験から「正常化のバイアス」が働いたであろう人々の言葉が数多くあり、そうならないためにはどのような教育内容が必要なのかを考えさせられる展示が多くあった。

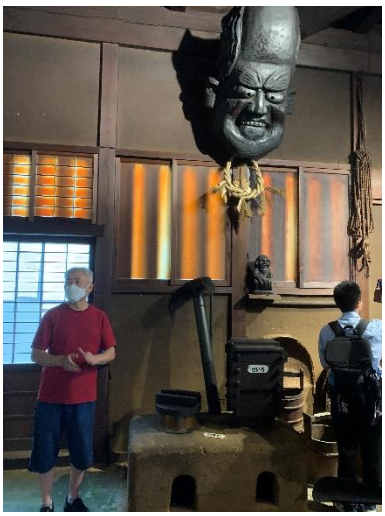
【陸前高田市内の震災遺構見学】

旧気仙中学校

いずれも津波の威力のすさまじさを感じざるを得ない。特に、津波の高さには圧倒される。「道の駅タピック４５」の最上部、気仙中学校の屋上部分まで津波が来たということを、実際に目の当たりにして、そのすごさに改めて恐怖を感じてしまう。

津波伝承館周辺を歩くと、新たに高さ 12.5ｍの防潮堤が完成し、気仙川にも大きな水門が完成している。かさ上げも終わり、町は復興しつつあるが、いかにハード面は整備されても、大切なのは人々がそのときにどのように行動するのかというところの一点である。その意味からも、今回の参加者が取り組もうとしている「自分ごとになる防災・減災教育」というテーマは、どこの地域においても大切な視点であり、汎用性のあるものであると考える。

【気仙大工左官伝承館】



主屋のかまどにて

気仙地方に伝わる大工左官の優れた建築技法を後世に伝えるために建設された。気仙大工とは、気仙地方の大工の集団で、陸前高田市小友町が発祥の地といわれている。気仙大工の足跡は江戸時代にまでさかのぼる。生活を支える目的で、農民が建設関係の仕事につき、独自の技能集団が形成されていった。家だけでなく神社仏閣の建設も手がけ、さらに建具や彫刻までもこなす技量を兼ね備えており、その技術力は全国的に高い評価を得ている。

いわゆる豪農の家を復元したものだそうだが、主屋の柱や梁の太さに圧倒されると同時に、欄間などに施された繊細で美しい細工は思わず見とれてしまうほどである。かまどの上には大きな面が鎮座しており、聞くと「火除けの守り神」だという。気仙地方の人々の習俗の一端がうかがえた。

9月5日（火）

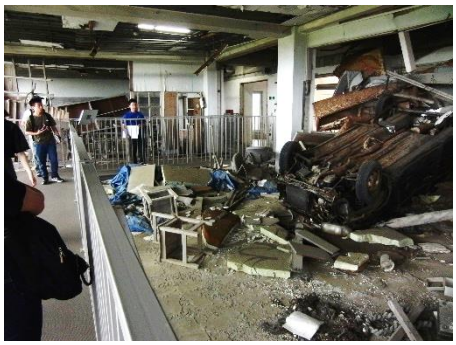
9:30	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館　　10:00～11:30　語り部ガイド
14:00 15:15	講話「防災教育と復興教育について」 　市立図書館長（元小学校長）　菅野稔氏　　@陸前高田市立図書館 講話「陸前高田市立博物館の再建」 　市立博物館長　松坂泰盛氏　　@陸前高田市立博物館 博物館見学
17:00	民宿吉田着

【気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館】

熊谷さんのガイドで旧校舎を巡る

津波で 4 階まで被災した気仙沼向洋高校旧校舎を「震災遺構」として保存・公開している。当時、向洋高校には生徒・教師・工事関係者約 250 名位がいた。校舎は海から約 150m、海抜は 0～1m位の立地条件下で 13m を超す大津波に襲われながら、臨機応変な迅速避難で誰一人犠牲にならなかった。

この日、語り部ガイドをしてくれたのは、熊谷さんという二十歳の学生さんだった。震災当時は階上小学校の 2 年生、ずっとこの地で育ち、気仙沼向洋高校に入学。在学中に「語り部クラブ」をつくり、卒業後も活動を続けているという。震災当時の教員や関係者に直接当時の話を聞き、「どうしても伝え続けていきたい」という強い思いをもって活動されているようだ。そんな若い彼の思いは、参加した同世代の学生には非常に共感できるものであったようで、積極的にいろいろな質問を投げかけていた。


校舎に突っ込んだ乗用車

散乱したままの教科書

校舎の 4 階に突っ込んでいる乗用車、当時の高校生が使っていた教科書、流れてきたもので傷のついた階段の天井など、当時のままで保存されており、津波の大きさと凄まじさを改めて思い知る。屋上に上ると、最後に残った職員が迫る津波を見てさらに上ったという建屋と、その時に使った生徒用の机があり、出口近くのシアターでは、「天を恨まず」で有名になった階上中学校の梶原裕太くんの答辞がフルバージョンで流れていたり、家族を失った方の回想録などが流れていたりした。

職員が最後に避難した建屋

熊谷さんに、「小学生に対する防災教育で大事なこと」について聞いたところ、「とにかく災害を身近に感じていてほしい。自分は『防災かるた』などで遊びながら大事なことを学んでいたように思う。」と語っていただいた。奈良においても、「防災かるた」などは、自分たちが学んだことを発信したり日常的に防災を意識化したりするには、いい取組ではないかと感じた。

【講話「防災教育と復興教育について」】　陸前高田市立図書館長　菅野稔氏

ご自身の体験から

菅野氏は、住まいは陸前高田ではあるものの、震災当時は西和賀町立川舟小学校に勤務されていた。秋田県境の町で、揺れに伴う大きな被害はあるが津波の心配はなし。教育委員会の帰宅提案で、陸前高田に向かうも、市内に入る段階で道路交通は麻痺。車中泊できるところまで戻り、翌日山間部を辿って何とか市内に入る。高田一中体育館に入り、以後その場所が避難所に。自宅は流され、土台のみ確認する。人事異動内示の修正があり、遠野市立土淵中学校に着任する。遠野は沿岸被災地支援の拠点だった。7月に滝の里工業団地仮設住宅に入居、四畳半二間に大人3人の生活が始まる。

菅野稔氏の講話

その後、陸前高田市立米崎小学校に転任する。米崎小学校は海抜19mの位置にあり校庭への浸水はなく、仮設住宅が建ち並ぶ。被災の状況に温度差があり、支援金や支援物資をどのように分配するかなど悩ましかった。防災教育は最重要課題であり、仮設住宅の住民を巻き込んで避難訓練を実施した。さらに、気仙小学校に転任する。気仙小校区は壊滅状態の地区で全員が被災者である。通常の避難訓練に加え、登校時や帰宅途中での避難訓練も実施した。「想定外」を減らすための日常的な取組を意識した。

陸前高田市内小学校の防災教育・復興教育について

岩手県教育委員会発行の副読本

どの時代であっても、「安全教育」は必須の課題であり、「防災教育」は安全教育の一環として行われるものである。児童等に実践的な防災対応能力を培うことを目的とし、「生き抜く力」を育むことと密接に関連していることから、各学年では教育活動全体を通じて体系的、計画的に防災教育を展開する必要がある。

「いわて復興教育」では、「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動を通して、3つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を育てること」と定義している。また、子どもたちが、「震災津波の教訓を後世に語り継ぎ、自らの生き方・あり方を考え、夢と未来を拓き、社会を創造すること」ができるように、県内すべての学校で取り組むことに大きな意義がある」と示している。各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動等の教育活動全体を通した学習であり、各教科・領域に横断的に位置付けてカリキュラムを編纂することになる。カリキュラムマネジメントの実際がそこにある。

菅野氏には、市内4小学校の防災教育計画、復興教育計画をご提供いただいた。地域ごとに様々な特徴があり、それに応じた体系的・計画的な学習活動がなされているのがうかがえる。これらを参考にしながら、奈良という地形的にも経験的にも事情の違う地域においては、どのような防災教育が求められるのか、より「自分事」になる小学校での防災教育はどうあるべきなのかなどについて考えていきたい。

【講話「陸前高田市立博物館の再建」】　陸前高田市立博物館長　松坂泰盛氏

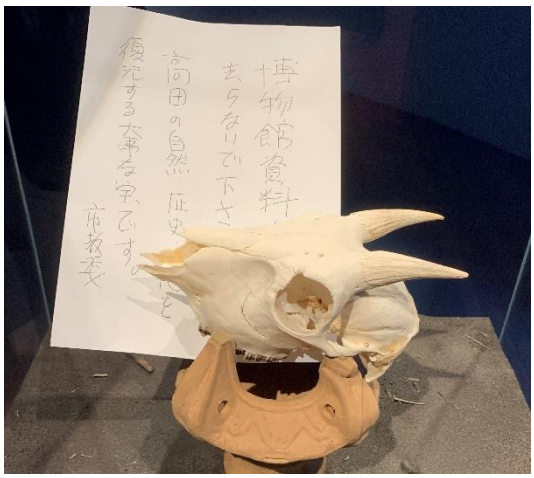
昭和 34 年 1 月に、東北第 1 号の公立博物館として、気仙町旧役場に開館した陸前高田市立博物館は、その後、図書館や「海と貝のミュージアム」を併設したカルチャービレッジとして運営されていたが、地震と津波により被災。博物館だけでも約 23 万点が壊滅、保管庫にあった約 12 万点の文化財も壊滅、職員も 10 数名死亡する事態となった。

松坂泰盛氏の講話

被災した文化財再生のため、岩手県教委、岩手県立博物館などが中心となって、12 年間にわたって活動を進めてきた。1 次レスキュー（被災現場から安全な場所への資料移送）、2 次レスキュー（再生に向けた安定化処理）を経て、令和 4 年度末で約 46 万点のうち約 33 万点の処理が完了した。安定化処理とは、各資料の生物学的劣化要因の除去、化学的劣化要因の除去、物理学的劣化要因の除去のため、除泥・脱脂・除菌・脱塩・乾燥・経過観察を経て、保存・展示が可能な状態にすることである。残る約 13 万点は、漆工品や革製品、ガラス乾板、インクや顔料を使用した紙資料など、処理の難しいものばかりだが、「文化財の復興なくして本当の復興はない」という合言葉のもと、今も市内から 30 分ほど離れた旧生出小学校で作業が続けられている。甦った資料を後世へ引き継ぎ、修復技術を世界に発信することを目標に、昨年 11 月に新しい博物館が開館した。

新たに開館した陸前高田市立博物館

私自身は、昨年、旧生出小学校で行われている作業を見学させていただいているので、新たな博物館に展示されている各種資料は、どれを見ても本当に貴重なものであり、きちんと後世に引き継いでいかなければという思いになった。展示ホールの入口に、骨格標本と「博物館資料なので持ち去らないでください。高田の自然、歴史、文化を復元する大切な宝です。市教委」のメモが展示されている。震災後の混乱した状況の中で見つけられたものだそうだが、これが展示ホールのいちばん最初のところにあることの意義を考え、文化財の再生作業に懸命に従事されている方たちの思いを重ねたときに、展示されている様々な資料の見方が変わるように感じる。



「･･･持ち去らないでください･･･」

また、防災について学ぶ我々としては、やはり「宿命とともに生きる」のコーナーでの、何度も地震や津波を経験してきて、高田の人たちがいかに生きる知恵を学び、そして引き継いできたかというところに興味をもった。特に、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波を経て、市内各地に残されている津波石碑に刻まれた言葉や、人々の中に残る教訓の数々は、奈良の地においても防災教育を考えていく上での大きな示唆であると考える。

9月6日（水）

9:00	宿舎発
10:00	黒石寺　【奥州市水沢区黒石町字山内 17】
11:00	角塚古墳　【奥州市胆沢区南都田】
11:30	胆沢郷土資料館　【奥州市胆沢区南都田字加賀谷地 1-1】
12:50	岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター・柳之御所遺跡
13:40	中尊寺【平泉町平泉衣関 202】
15:10	毛越寺【平泉町平泉字大沢 58】
17:50	仙台空港着　→　レンタカー返却
18:55	ANA740
20:20	伊丹空港着　　解散

【黒石寺】

729 年、行基菩薩の開基と伝えられ、延暦年間には蝦夷征討の戦火にあい焼失。その後、849 年に慈覚大師が妙見山黒石寺と改め復興した。本尊は「薬師如来坐像（重要文化財）」で、胎内に貞観 4（862）年の胎内銘があり、わが国仏教史の中でも極めて貴重な仏像群を多数所蔵している。旧暦の正月 7 日夜から翌朝にかけて「裸の男と炎のまつり」蘇民祭が行われることでも有名。

黒石寺本堂は明治に再建

【角塚古墳】

角塚古墳にて

日本最北、岩手県唯一の前方後円墳。5 世紀後半に作られたと考えられる。全長 43m、墳丘の高さ 4.3m。調査によって、濠をめぐらし、円筒埴輪と形象埴輪を飾り、葺石を並べた典型的な前方後円墳であることが分かる。

この地方の豪族の墓地と考えられている。伝説では、高山掃部長者の妻が大蛇に変身し、農民を苦しめていたところを小夜姫がお経の力で退治し、その大蛇の角を埋めたのがこの古墳だといわれている。

【胆沢郷土資料館】

歴史書「続日本紀」には、「水陸万頃（すいりくばんけい）」という記述があり、胆沢の地が水に恵まれた豊かな土地であったことが記されている。この地は扇状地であるがゆえ、先人たちが苦労と努力を重ね開拓してきたところであるので、胆沢の歴史は胆沢扇状地の歴史であると言われる。館内には、角塚古墳の出土品模型や、市内の縄文遺跡である大清水上（おおすずかみ）遺跡から出土した土器、石器なども展示されている。

胆沢郷土資料館の展示

【岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター】

世界遺産「平泉」の価値を広く世界中に伝え、人類の共通の財産として後世へ継承するための拠点となるべく、令和３年 11 月に開館した。

仏国土の世界観を映像で投影するプロローグシアター、復元された「平泉館」のジオラマ、柳之御所遺跡から出土した重要文化財など、平泉の文化遺産の価値や、平泉の歴史、平安時代の生活の様子を展示・解説している。柳之御所史跡公園内に設置されており、奥州藤原氏の政庁である柳之御所遺跡を見学できる。

ガイダンスセンターの展示

【中尊寺】

中尊寺金色堂

奥州藤原清衡の中尊寺建立の趣旨は、11 世紀後半に東北地方で続いた戦乱（前九年・後三年合戦）で亡くなったすべての霊を敵味方の別なく慰め、「みちのく」といわれ辺境とされた東北地方に、仏国土という平和な理想社会を建設するというものであったと言われる。その意味でも、清衡の思想そのものは、持続可能な未来を見据えたものであり、「誰一人置き去りにしない」という SDGs の理念に通ずるものであると言っていい。「すべての生きとし生けるもの」のことを考えるというところに、「動植ことごとく栄えんことを欲す」とした聖武天皇と相通ずるものがあると感じる。

【毛越寺】

平安時代後期に奥州藤原氏二代基衡と三代秀衡が金堂円隆寺、嘉祥寺など壮大な伽藍を造営し、その規模は堂塔四十、僧坊五百を数え、わが国無二の霊地と称されたが、その後度重なる災禍に当時の伽藍は焼失した。現在大泉が池を中心とする「浄土庭園」と平安時代の伽藍遺構がほぼ完全な状態で保存されている。

毛越寺は「モウツウジ」と読む。なぜそう読むのかずっと疑問であった。通常、越という字を「ツウ」とは読まないが、越は慣用音で「オツ」と読む。したがって「モウオツジ」が「モウツジ」になり、さらに「モウツウジ」に変化したものであるという説明を聞き、やっと納得した。

毛越寺　浄土庭園大泉が池

全日程を終えて

まず、今回文化遺産調査が実施できなかったことは残念であった。本プロジェクトの柱であり、10 年間にわたって、陸前高田市内および近隣地域の埋もれた文化財を調査し、その価値を教材化して該当地域の小・中学生に知ってもらい、地域に対する誇りや愛着をもってもらうというこれまでの主旨を果たせなかったことは残念に思う。

６月に学内で参加団員を募集したところ、10 名（文化財調査 4 名、ESD 防災 6 名）の応募があり、面接を経て、文化財調査班 2 名、ESD 防災班 3 名、計 5 名の参加団員を決定し、その後数回の事前学習会や準備会を経て、派遣に備えていた。そのため、文化遺産班として派遣予定だった 2 名の学生には、当初の目的とは違う活動を強いることとなったが、2 名とも ESD 防災の調査・研究にモチベーションを高く持って参加してくれた。

今後、参加した 5 名の学生で、奈良の小学校 6 年生段階における、より「自分事」となる防災・減災教育のあり方について、様々な教科・領域を横断的に学ぶカリキュラムを構築していく予定である。現地で実際に見て、聞いて、感じたことを大事にしながら、効果的なカリキュラムの開発に取り組んでいきたいと思う。

最後に、今回も調査のお世話をいただいた、山田市雄教育長はじめ陸前高田市教育委員会の皆様、特に行程のすべてにわたってコーディネートいただいた陸前高田市立博物館長　松坂泰盛様に心より感謝申し上げたい。

追記：本プロジェクトの第 1 回より多方面にわたってご尽力いただいた、故及川征喜氏の御内儀が、「亡くなった主人が大変楽しい思いをさせていただいたお礼を一言伝えたくて。」と訪ねてこられた。本プロジェクトの歴史と継続している意義深さを強く実感した。

民宿吉田にて

陸前高田市防災教育研修

文化遺産教育専修 4 回生　大竹玲央

陸前高田市は岩手県南部にある市であり、宮城県気仙沼市と隣接している。豊かな自然に囲まれ縄文の時から人々は住んでおり、後の時代には伊達藩の直轄地として扱われたなど長い歴史を持つ地域である。しかし沿岸部の地域であるため災害による被害を何度も被ってきた。2011 年 3 月 11 日、東日本大震災で福島県・宮城県・岩手県沿岸地域は地震・津波による多大な被害を受け、陸前高田市も例外ではなかった。地震発生からしばらくして到達した津波により、市内の建物は流され、人々の命も失われた。残された人々は避難所での生活を余儀なくされ、3 月の寒さの中支援が届くまで厳しい生活が続いた。現在でも復興に関する活動は行われており、完全に復興できたわけではない。復興へ少しずつ進んでいる陸前高田市で防災に関する研修を行うことができた。

今回の研修では様々なことが印象に残っているが、その中でも「津波も怖いが、それよりも恐ろしいのが津波の記憶が風化してしまうことだ」という言葉が印象に残っている。確かに津波の恐ろしさは映像・写真、そして数値からも知ることができる。しかし、この記憶・記録が風化してしまうようなことがあると、次に似たようなことに遭遇した際どのように対応・行動すればいいのか分からないままになってしまう。その結果甚大な被害が生じてしまう。このような最悪な事態を防ぐためにも記録・記憶を風化させてはならない。そして風化を防ぐことは防災に大きくつながっていくと考える。

風化を防ぐためには出来事や教えを語り継いでいかなければならない。今残っている人々から当時の話などを聞き取り、紙媒体や電子媒体など何らかの形で残さなければならない。特に電子媒体ならば資料の風化を考慮することがないので、このような記録を残していく上では非常に効果的なものだと考える。また紙媒体と異なりかさばらないといったメリットを挙げることもできる。紙媒体でなら電子機器を使用することなく誰でも閲覧が可能なので、幅広く震災の教え・出来事を普及させることができる。しかし東日本大震災でもあったように津波による被害を受け、古文書や書簡といった紙媒体の文化財は修復を余儀なくされている。そのためこのような被害を避けるために、電子媒体による記録・保存も有効になってくる。

風化を防ぐといった考えは震災に関する記録だけではなく、戦争に関する記録にも共通すると考える。戦争の記憶を風化させてしまえば、再び戦争が勃発してしまう可能性がある。特に第二次世界大戦に関する語り手は徐々に減少しており、語り部からの伝達が難しくなってきている。そのなかで戦争に関する資料、戦争を経験した人々の日記や戦争により破損した建築・道具などが当時の様子や、戦争の恐ろしさを伝える上で重要な役割を担うと考える。代表的な例として原爆ドーム・平和記念公園が挙げられる。原爆の威力を現在の人々に示すことや、戦争・平和について考えることができる機会を人々に与えることができる。このような形で記憶・記録を風化させない取り組みを行わなければならない。実際に陸前高田市ではタピック 45 や気仙中学校といった震災遺構が残され、東日本大震災津波伝承館といった施設も存在している。博物館のような施設で情報を多く得ることができ、実際に被害を受けた建造物を目にすることで震災の記憶・記録について深く学ぶことができると感じた。伝承館の展示はパネル展示や映像資料の展示が行われていたが、その中でも気仙大橋の破片や破壊された消防車の展示は印象的だった。この展示のように人々に直接訴えかけるような展示が震災の記憶を風化させないためには必要なのだと思った。ただ物的資料の展示だけでは伝えられる情報に限りがあるので、パネル展示でより深い情報を提供することができる。このような形での展示はより詳細な情

報を提供でき、災害から身を守るための教えが視覚的に与えることができると思った。他にも防災クエストといった市内を回りながら震災の記憶や避難場所を知ることができる取り組みが行われている。この取り組みは実際に市内を歩きながら避難場所を確認することもでき、楽しみながら防災について学ぶことができる。我々もこのクエスト受けたが、謎解きが難解なところがあり意外と時間がかかってしまった。

前述の施設だけではなく、陸前高田市在住の方々からもお話を聞くことができた。その中で震災の被害は災害による直接的なものだけではなく二次的な被害も多かったということを知ることができた。避難所での生活や、震災の記憶から生じるストレスなど直接的な被害だけではなく、二次的な被害も多く生じた。心のケアを必要とするのは大人だけではなく、児童生徒たちにも欠かせなかった。その中で、市の教育委員会は学校が再開した後、心のケアが必要な児童生徒を把握するための調査を行った。その中には注意しなければならない生徒もいた。無事に避難することができても、避難している場所から津波で破壊されていく街や流されていく人々を目にすることがあった。このような光景をみて、トラウマを植え付けられた生徒も必ずいたはずである。まずは避難することが防災上必要だが、避難後の対処やケアも考えなければならないことを実感することができた。心のケアは教員だけでは対処しきれないため、外部の機関から専門家を招くことや医療機関と連携することが求められる。普段からチーム学校として活動し、外部機関と連携がスムーズにいくように準備を進めておかなければならないと思った。

本来ならば陸前高田市の文化財調査として参加する予定でしたが、様々な事情により防災班として参加させていただいた。今回の研修で教育という目線はもちろん、文化遺産ならではの目線で防災について考えると、資料の活用が欠かせないと思った。実際に震災を経験した人々の証言や破壊された物的資料から、様々な情報、教訓を引き出すことができると感じた。また、歴史的な目線からでは三陸を襲った地震は過去に何度も発生し、確実なものでは平安時代にまで遡ることができる。文字資料に残されていないが、堆積物からでは平安時代よりさらに昔から、津波の発生があったと明らかになっている。東日本大震災だけではなく、三陸周辺では何度も地震・津波による被害を受けてきており、その中で人々は過去の教えを現在まで伝え、津波が起きた時に備えてきた。このような教えを風化させないためにも防災教育が欠かせないものとなっていると今回の研修で実感した。

左；タピック 45。建物の上部に見える茶色の表示（T.P.14.5m）の位置にまで津波が到達した。
右：東日本大震災津波伝承館で展示されている、津波の被害を受けた消防車。写真では見えないが、手前側に津波で破壊された気仙大橋の残骸も展示されている。

陸前高田市文化遺産調査団に参加して

書道教育専修４回生　櫻木友渚

１．はじめに

陸前高田市文化遺産調査団の参加を希望した理由として、小学生４年生の自身の経験が関係している。当時住んでいた徳島県では、東日本大震災を引き起した地震による大きな揺れは観測しなかったものの、実家のすぐ目の前の海が急速に引いていった。そして、３ｍほどある坂を乗り越えて家の近くまで波が押し寄せた。ひとまず２階に避難し、テレビから流れ続ける津波に飲み込まれる街並みに、何が起こっているのか理解できないまま一晩を明かした。初めて津波というものを認識したあの日以来、実際にこの目であの日に被災地で起こったことを知り、学びたい気持ちを抱えていた。

今回、調査団の一員として貴重な機会をいただき、様々な方面からの見聞、体験を沢山得た中で、自分自身の考え、変化について述べたい。

２．被災地を訪れて

陸前高田市を訪問して感じたことは主に二つある。

一つ目は、海を近くに感じないことである。高い防潮堤により海は見えず、また塩の匂い、波の音もしなかった。しかし、東日本大震災津波伝承館の防潮堤の上にある「海を望む場」に登ると、穏やかな広田湾が目の前に広がり、そこでやっと海の匂いと波の音を感じた。海と町を完全に遮る高さの防潮堤を設置しても、完全に津波の被害から逃れることはできない。町に点在する震災遺構が示す津波の高さに、自身の津波に対する認識の甘さを実感した。

二つ目は、陸前高田市の復興についてである。10 数年で壊滅状態にあった市街地は、非常に綺麗に整備されていた。震災により街を離れた人、離れざるを得なかった人は多くいる。その中でも、慣れ親しんだ地元の再建のため、また震災前の日常を取り戻すため行動されてきた方々のお話を伺った。

学校現場では面談などで個々の被災状況を把握し、高校を卒業するまでこれまでの面談記録を引き継ぎ、一人ひとりの生徒の配慮を行なっていた。また、博物館では陸前高田、そして海がもたらす自然災害への恐れだけでなく、敬いを持って生きる人々の営みを伝えるため、様々な機関と協力しながら再建に取り組んでいる。加えて、今回宿泊した民宿でも、国からの補助金申請書を周りの人と協力しながら書き上げ、震災から約２年後に再建した。多くの方々が自分にできることを考え、歩まれてきた日々の上に、この町や人々の営みが成り立っているのだと実感した。

一方で、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の語り部の方が仰った「失われた建物などは造ればなんとでもなるけど、震災前の生活という日常が奪われてしまう」という言葉が忘れられない。失われた物の大きさより、形のないものの消失こそが人の心へ大きな傷を残してしまう。復興に終わりがないが、東日本大震災のような大災害から今ある日常が当たり前ではないことに気づき、防災意識を高め、後世へ伝承していくことが復興につながるのではないかと考えた。

3.つなみてんでんこ

陸前高田市で防災謎解きまち歩き型の観光サービスである「防災クエスト大作戦」に参加した。陸前高田市の名所を回り、謎解きに苦戦しながら防災について学ぶ中で「つなみてんでんこ」という言葉を初めて知った。津波が来たら人に構わず逃げろという意味であるが、自分だけ助かれば良いというわけではない。一人ひとりが自分の命を大切に、生きるために避難することによって、最終的には他者を救

うことになる、互いの絆と人との信頼の上に成り立つ言葉である。自然がもたらす猛威に対して人間は非力であり、防潮堤などのハード面の対策では限界がある。しかし、防潮堤を越える津波は来るという認識を持つための避難訓練や防災学習などソフト面の対策を行うことによって命を守ることができる。実際に東日本大震災では、被害が大きい地域であっても１人も死亡者を出していない学校が多く存在していた。これまでの自然の猛威を忘れず、自分ごと化して日々の訓練を怠らないこと、そして実際に被害にあった際は想定にとらわれず、その状況下でできる最善の行動をとることが非常に大切であると実感した。

4.おわりに

今回の調査を通じて、大きく認識が変化した点が一つある。それは、東日本大震災で大きな被害を受けた地域は決して無防備であったわけではないということだ。明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波など幾度となく訪れる大災害の度に、先人たちは津波対策を行い、教訓を残していった。しかし、先人の教えがあり、防災教育に力を入れていても、多くの命が失われたのである。そこには、いざ非常事態が起こった時、危険性を低く見積もることで不快さをなくす「正常化の偏見」が働いていることが大きな原因であることを知った。いつ、どんな状況で地震が起こっても率先して避難ができるようになるためには、自身の避難経路の知識や訓練などの日頃の備え、正確な情報の収集、そして想定に囚われないことが必要となる。これまでに大きな災害を経験していない奈良の地でも、自分の命を守る行動ができる人を増やすために何ができるか、今回の調査を元に模索していきたい。

図１　東日本大震災津波伝承館「海を望む場」

図２　防災クエスト大作戦に取り組む様子

防災・減災教育の大切さ
―事実を知り、学び、伝えていくことの大切さー

音楽教育専修 3 回生 藤本尋巳

1. はじめに

2023 年 9 月 3 日から 6 日にかけて、陸前高田市文化遺産調査団に参加した。私は奈良県で生まれ育ち、幸いにも大きな災害には遭わずに暮らしてきた。避難訓練を経験しても、「奈良県はそこまで被害は及ばないだろう」とどこか他人事のように思っている人も少なくはないと感じた。しかし、近年の異常気象発生頻度の増加、南海トラフ地震の予測等から、いつどこでどのような災害が起こるか分からないことも事実であり、一人ひとりが防災・減災に関心をもつことが求められていると考える。そこで、陸前高田市文化遺産調査団という貴重な経験を通し、まずは、東日本大震災で起こった事実や被災された方の証言を私自身が見聞きし、防災・減災について自分事として考察する。そして、奈良県の教員になったときに、子どもたちにも自分が学んだことを伝え、防災・減災の大切さについて納得しながら行動化することを促せるよう教材開発に取り組みたいと考え、調査団に参加させてもらった。

2. 現地で学んだ防災・減災教育における大切にしたい視点

2.1 震災の事実を知り、学ぶ

2011 年に起こった東日本大震災から 12 年が経ち、現在の小学生は震災後に生まれた子どもばかりである。菅野様の講話の中で、「震災がもたらしたもの、地震・津波・火災等の災害に関する知識をきちんと勉強しなければ、震災の教訓は残っていかない。風化させてはいけない。」と仰っていたことが心に残っている。震災がもたらした事実を知り、学ぶ上で特に伝えたいと考えた点を二つ挙げる。

一つ目は、震災がもたらした被害の大きさや恐ろしさについて、残された写真や映像、様々なデータ、証言等から正しい知識を得ることである。大きな地震が起きると、沿岸部では津波が押し寄せ、内陸部においても、津波により川が逆流して堤防が決壊し、さらには火災までももたらす。私自身、岩手県陸前高田市や気仙沼市の震災遺構で被災状況を実際に見て、こんなにも高い津波が街を襲ったのだと想像すると、言葉が出ないほど恐ろしかった。そしてその津波は、時速 70～80 ㎞で迫ってくるため、一瞬にして街の様子を変えてしまう。一瞬だからこそ、一分一秒でも早く避難しなければならない重要性を実感した。

旧気仙沼向洋高校
冷凍工場の激突跡

二つ目は、震災が起こった直後の人間の心の動きだ。震災直後、被災された方の中には、「この地区には津波は来ない」という安全神話を信じたり、逃げるのをやめて家に物を取りにいったり等、すぐに逃げない人が少なくなかったそうだ。逃げられるのに逃げない理由には、異常事態や非常事態に遭ったときに、危険性を低くみつもることで不快さをなくそうとする人間の心理がある。根拠もなく「自分は大丈夫だ」と思ってしまうこの心の動きは、人間の心理上取り消せない。しかし、この心の動きが人間にはあると知り、様々な想定をしながら避難しなければならないと学んだ。

陸前高田市　ユースホステル

2.2 事実や教訓を伝承していく

東日本大震災は 2011 年に起こったが、1896 年に明治三陸地震、1933 年に昭和三陸地震、1960 年にはチリ地震の影響により、地震や津波による災害は繰り返し生じており、今後もいつ起こるか分からない。日常生活の中では想像しきれないほどの災害について、災害への正しい知識理解とともに、実際に被災された方の声や想い、教訓をきちんと受け継いでいかなければならないと感じた。今回私が学んだ中で、特に伝えたいと感じたものを二つ挙げる。

一つ目は、「津波てんでんこ」の教訓だ。地震が来たら、てんでんばらばらに一人一人が自分の命を守り、素早くそれぞれに行動を取るべしという教えである。「自分で自分の命に責任をもつことが、家族や地域を守ることに繋がるのだ」といった言葉が印象に残っている。震災時、家族や周りの人を探そうとし、奪われた命があることも事実である。この教えは、地震に限らずあらゆる災害に共通するものだと感じた。台風や風水害においても、誰かを助けようとしている間に被害の状況はどんどん悪化していき、避難できなくなる可能性は十分にある。助けられるのではなく、自分から率先して避難しなければならない。そのためには、普段から災害が起きたときのことを想定し、自分の取るべき行動を理解しておくこと、自分で考え自分の命を守る意識を養う必要があると考えた。

二つ目は、想定に捉われず、置かれた状況で最善を尽くす行動を取るということだ。震災当時の気仙中学校の教員や生徒を例に挙げると、まずは全員で第一避難所に避難し、第二避難所は沿岸に近い気仙小学校だったが、大きな津波が来ることを予想して山に避難し、より高い場所を選択したことにより生徒全員が助かったそうだ。その場にとどまらずに、「ここだと危ないかもしれない」という意識を持ち、最善を尽くせるよう主体的に判断することが大切である。また、ハザードマップを使って被害の大きさや可能性を知ることも大切だが、その予想以上の災害も起こりうるということを心づもりしておかなければならないと学んだ。東日本大震災による津波では、震災当時に周知されていた津波ハザードマップによる浸水予想範囲をはるかに上回る範囲で浸水した。予想に捉われず、その場で自分が見聞きした自然の様子や情報をもとに、命を守る行動を取らなければならないと学んだ。

2.3 防災教育と ESD の視点との関連

防災・減災教育について考えを深める中で、ESD の視点と結び付けられる点があると考えた。「津波てんでんこ」の教訓にもあるように、自分の命を自分で守ることの責任性、普段から要配慮者の対応も視野に入れ、コミュニティでみんなを巻き込みながら「共に」助け避難するための連携性も必要となってくる。学校現場で、防災教育を学校内にとどめることなく、地域の一員として子どもたちが災害時に行動できるよう、地域と連携・共生しながら学びを展開し、コミュニケーション能力や他者と協働する姿勢を養いながら、地域の防災について考える時間を取り入れたいと思った。また、過去の災害から学び、今後の自然災害を予想しながら防災の取り組みを考え、地域の方と学び合うことも、災害に強いまちづくりに必要だと思った。このような視点を踏まえ、防災・減災教育の教材開発、学びの設計に取り組みたい。

3. おわりに

今回の調査では、自然がもたらす威力や震災時の人々の状況・心境について、現地に赴くことで学べるものがたくさんあった。大変貴重な経験をさせていただき、ご協力頂いた多くの方々に改めて感謝を申し上げる。そして、今回学んだ防災・減災の教訓・被災された方の思いや願いを奈良の地で発信し、恩返ししていきたい。

令和５年度 陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修３回生　村島大賀

１．はじめに

2023 年 9 月 3 日から 6 日にかけて陸前高田市文化遺産調査団の ESD 防災班として参加した。私は 12 年前に日本で起きた大震災である、東日本大震災の被災地に初めて訪れ、被災した地域やそこに住む人々など多くのものと触れ合い経験した。震災が発生した当時、私は小学生であり、その被害の状況や何が起こったのかということに対して十分な理解を得ることができず、これまで自分自身が大きな災害に見舞われた経験がないことから被災することについて本当の意味で理解することができなかった。今回の調査を通して、災害の恐ろしさやそれがいつ誰の身にも起こり得るものであることを改めて認識させられた。以下では今回の調査を通して、私が学んだことやそれについて感じたことについて述べていく。

２．“災害から逃げる”ことへの認識

図１ 東日本大震災津波伝承館の展示

東日本大震災が未曽有の大災害であり、国内外に大きな影響を与えたことは周知の事実である。しかしながらそれは想定されていた大災害だったのだろうか。答えは否である。誰もが当たり前の日々を、日常を、何気なく過ごしていた最中に地震が発生し、その影響によって津波が多くの地域を巻き込んでいったのだ。地震や津波などの自然災害は予測不可能な脅威であり、私達人類は逆らうことはできない。だから上手く付き合っていくしかないと東日本大震災津波伝承館（図１）の職員の方からお話を聞いた。自然災害から自分の命を守るためには何をするべきであるのか常に考え、行動することが何よりも大切なことであると学んだ。

しかしながら自然災害という脅威に対して、すぐに避難することは客観的に考えると必然であることは確かである。私達は災害が自分の目の前で起きたとしても、それに備えた動きができるように、避難訓練などによって防災への意識を高めている。しかし実際には地震が発生して、津波が押し寄せてきたことを認知してすぐに非難しようとした人の数は、全体の 6 割程度で残りの 4 割は様々な理由ですぐに避難しなかったのである。陸前高田市だけでなく、地震の被害が頻繁にある周辺の地域では大きな地震が起きた後には必ず津波がやってくるという認識を持っていたにも関わらず、なぜ全ての人が避難するという選択肢を選ぶことができなかったのか。それは「自分に起きていることは現実ではない」という一種の自己防衛から引き起こされたのである。地震という強大な外的要因によって引き起こされるものは津波だけではなく、人々にストレスという形で重く圧し掛かり、合理的な手段を取ることができないのだ。私はこれだけ日本各地に災害が発生し、幾度も災害に備えた対策を行っているにも関わらず、真っ先に避難を行うという選択肢を取ることができないのはなぜかと疑問に思っていたが、想定しなかったことが起こるとすぐ行動に移すことは難しいと今回の学びを通して改めて感じた。

過去には同様の自然災害はいくつも発生しており、その度に先人達は同じ被害を生むことがないよう、後世に教訓を残してきた。しかし、いつ如何なる時でも想定外のことは起きる可能性があり、「絶対安全」「絶対問題ない」というものは存在しない。どのような状況においても、自分の命を守るために自分

が取るべき行動をそれぞれが見つけ出して、実行する。その一つ一つの行動が周りの人々に伝播していき、他者を助けることに繋がっていくのではないかと私は考えた。

３．復興だけではない次へのステップ

震災から 12 年の月日が流れ、陸前高田市の町並みは少しずつ活気を取り戻しつつあると山田教育長は言った。実際に陸前高田では震災の惨状から立ち直り、松原の道の駅では多くの人々で賑わっており、飲食店などでは外部から訪れた人々で盛んになっていた。震災前には青々と茂っていた高田松原も徐々にその姿を取り戻していた。建物や風景などは長い時間をかけて、作り直すことはできる。しかしながら、人々が経験した記憶や記録は人々が残そうと考えて行動しない限り、残すことはできない。長い時間をかけると経験や記憶が薄れていき、次に活かすための知識や教訓を伝えていくことができないと陸前高田市立図書館館長の菅野館長は言っていた。陸前高田市で起きた災害はその地域に限られたものではない。日本各地どこでも同じような被害が発生する危険性は十分に考えられ、対策やそれに関する知識を必要としている。「何が起きるのか」ではなく、「どう行動する、考える」べきであるのかについて知るためには、人々が災害について知らなければならず、そのためには各地域の教育に防災という概念を組み込んでいく必要があると私は考えている。その教育を展開していくためには、実際に現地に訪れ、現地の住民の方々の意見を聞いた上で、自分達には何ができるのかについてそれぞれが考えていくことが求められる。災害前の姿に戻すことだけではなく、そこから次にどのような形で今回のことを繋げていくのかという部分が非常に重要であり、自分自身で思考することの大切さがあるのではないかと考えた。

図２ 3.11 希望の灯り

４．最後に

今回の陸前高田市での調査を通して、東日本大震災がもたらした影響やその被害に遭った地域の人々の生の声を聞くことができた。統計などのデータではなく、実体験から語られた１つ１つの言葉が自分達の記憶に鮮明に残っており、調査する以前から聞いていた「つなみでんでんこ」という言葉の深い意味を知った。同時に災害の影響は自分達にも訪れるものであり、自分の命を守る行動を考えなければならないと改めて認識させられた。奈良の地で津波が起きる可能性は限りなく低いが、起こる災害は未知数でありそのことを自分だけではなく、これからを生きていく生徒や周りの人々に伝播させていくことが、自分が今回の調査に加わった目標であると考えている。

陸前高田市文化遺産調査団に参加して

国語教育専修２回生　田中愛花

1.　はじめに

私は、2023 年 9 月 3 日から 6 日までの 4 日間陸前高田市文化遺産調査団 ESD 防災班として参加した。陸前高田市の東日本津波伝承館、気仙沼市の気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館、名取市震災復興伝承館をはじめ、東日本大震災の実態を知ることのできる施設に沢山訪問することができた。また、実際に東日本大震災を体験した菅野稔氏氏や松坂泰盛氏の講話や、語り部の方の話を聞くことができた。多くの質問にも丁寧に答えてくださり、大変充実した時間を過ごすことができた。

私は今回の調査で、東日本大震災の脅威と防災・減災の意識を持つことの大切さを肌で感じた。参加した 4 日間で学んだことを、「防災・減災教育」と「未来へ繋ぐ復興」をテーマに述べる。

２. 防災・減災教育

我々は、防災・減災教育について陸前高田市立図書館長をされている菅野稔氏の講話を聞くことができた。初めに菅野氏がおっしゃったことは「今の小学生は、東日本大震災を知らない」ということである。確かに、震災から 12 年経っているので計算上当たり前のことだ。しかし、日本に計り知れない衝撃が走った天災を知らない人がいるのだということに、私は驚いてしまった。そして、直接体験でない事象をもとに伝える防災・減災教育は、とても重要でありながら、難しいものだと思った。菅野氏には、防災・減災教育に大切な四つのことを教えていただいた。一つ目は、安全教育を進めることである。安全教育を通して自分で生きていく力をつける。二つ目は、被災から連想することである。天災は地震や津波の他にも台風による風水害・停電、断水・渇水、異常気象などさまざまなものがある。多種多様な天災によって引き起こされる状況を前もって知っておくことは重要なのだ。三つ目は、地域の特性からの連想である。陸前高田市は、東日本大震災が連想され、今後も津波が広い範囲で起こりうる地域であると考えることができる。四つ目は、聞くことの大切さである。直接体験でないことを知るには、体験者の記憶に加えてさまざまな調査の記録を聞くことが大切になってくる。

菅野氏の話の中で、避難をする際はマニュアルにとらわれず「命を守ること」を優先して行動するという話があった。この考えは、多くの伝承館でも学ぶことができた。東日本津波伝承館では、気仙中学校が例に挙がっている。気仙中学校では、東日本大震災が起こる数年前に大津波の避難訓練や避難場所の見直しが行われていた。東日本大震災が起こった際は、あらかじめ決めていた第一避難所にすぐに避難し、十分な高さではないと判断すると、第二避難所、第三避難所と場所を移した。最終的にはマニュアルにはない、第三避難所よりも高い二日市公民館まで避難することとなった。結果、在籍の生徒・教職員は全員が無事であった。気仙中学校では、地道に津波を想定した避難訓練や津波体験者の防災講話を毎年実施していたことに加え、生徒や教職員が津波の恐ろしさと避難の大切さを聞かされ続けて育ってきたことで緊急時にも咄嗟に「命を守ること」を優先して行動することができたようである。この事例から、私は、防災・減災教育の目指す最終目標は、緊急時に自分で「命を守ること」を優先した行動を取れるようになることではないかと思った。

図１　屋上まで津波が襲った気仙中学校

3.　未来へ繋ぐ復興

震災から 12 年が経った今、陸前高田市は確実に元気を取り戻してきていると感じた。新しい建物が並び、浜辺には再植林された若い松が連なっていた。今年には陸前高田市立博物館も再建され、東日本大震災で失われかけた文化財も着々と元通りになっていた。私は、復興が進む姿を初めて自分の目で見て、さまざまな人の力や想いが陸前高田市に詰まっているのだなと思った。

我々が、陸前高田市立博物館長の松坂泰盛氏の話を聞いたとき新・博物館の基本理念というものを知った。それは、陸前高田の豊かな自然・歴史・文化を、震災の記憶とともに未来へ伝え、地域に根差し活力あるまちづくりを推進する総合博物館であった。私は、なぜ博物館を再建することが活力あるまちづくりへつながるのか疑問に思い調べてみた。その答えは、博物館の宝物一つ一つに、そのまちの物語と発見が詰まっているからだそうだ。博物館に行けば、その町の人々の故郷がどのような場所なのか、どんな自然や歴史、暮らしがあるかわかる。これまでの陸前高田に関わる人と、これから陸前高田に関わる人の架け橋となるのが陸前高田市立博物館であるそうだ。私はもう一度、個人的に博物館に訪れてその真意を汲み取りたいと思った。

学校現場では、今でも心の復興に取り組んでいるようだ。心と体の健康を定期的にチェックし、その内容を小学校・中学校・高校と引き継ぐ体制が整っている。また、子ども個々の背景を配慮した発言や、活動をされているそうだ。震災に見舞われた子ども達を、地域全体で支えようという意識をひしひしと感じた。

４．最後に

今回の調査団に参加して本当によかったと思うことは、震災から復興するまちを自分の目で見ることができたことである。2011 年 3 月 11 日にテレビで見た東日本大震災は、あまりに衝撃が強く復興されていく様子など考えられない光景だった。しかし、今回の調査で整備されているまちの様子や伝承館に残る記録を見たり、語り部さんの話を聞いたりする中で、陸前高田の人々の強さを感じた。図２は、陸前高田市立博物館再生のシンボルとなっている書き置きである。「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然、歴史、文化を復元する大切な宝です。市教委」と書かれている。実はこれ、市の教育委員会の方が書いたものではない。地域の方が機転を効かせてこのメッセージを残したのではないかと言われている。もちろん、自分の命を守ることが最優先だが、生死の瀬戸際でこのような勇気ある行動ができる人もいるのだと感心した。

これからは、私が今回陸前高田で学んだことや感じたことを、奈良県の教育に生かしていくにはどうすれば良いか真剣に考えていきたい。

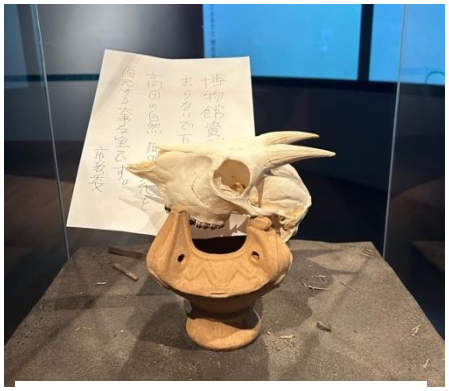


図２　陸前高田市博物館にて

図３　震災遺構タピック 45